

カンボジア村落部の仏教的知識に関する一考察

老人と若者との関係から

武田龍樹(京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程)

本発表は、カンボジア村落部における仏教的知識の断絶と持続について報告するものである。

カンボジアは、フランス植民地からの独立後、近年にいたるまで、激しい社会変化と混乱を経験してきた。特に1975年から1979年までのポルポト時代にあつては、経済活動や教育活動の禁止、強制移住や強制労働など、既存の社会システムを破壊する極端な共産主義政策によって、100万とも200万ともいわれる死者を出したとされる。また、この時代には仏教の殲滅も試みられ、寺院の破壊、僧侶の強制還俗や処刑、あらゆる宗教活動の禁止がなされたことにより、カンボジアの仏教は一時的に消滅した。続く1980年代の人民革命党政権の下で仏教は復興されたが、その活動には様々な制限が加えられた。そのひとつが50歳以上の元僧侶にしか出家を認めなかったことであり、当時のカンボジア国内にはわずかな僧侶しか存在しなかった。

1989年のベトナム軍の撤退とそれ以後の社会主義体制から自由主義経済への移行の中で、出家制限の撤廃をはじめとして政府による宗教活動への制限は徐々に緩和した。1990年代には、かつて破壊された多くの寺院が再建され、出家者である僧侶の人数も増加していく。しかしその一方で、豊富な知識・経験を有した僧侶の不足や経典・寺院の破壊などから、若年の僧侶の知識不足やモラルの欠如が指摘されている。また、1970年代から1980年代にかけてのポルポト時代や内戦によって若者たちが伝統的な仏教実践の影響を直接受けずに育ったことから、老人と若者との仏教認識のギャップが拡大していることも指摘されている。

本発表では、知識や経験を保持する老人とそれらを保持しない若者とが仏教実践をめぐるどのような関係にあるのか、そしてその関係において仏教的知識はどのように伝達されるのかについて検討したい。

本発表はカンボジア東部コンポンチャム州村落部の調査にもとづくものである。調査地ではポルポト時代以後にひとりのカリスマ的僧侶が現れ、俗人たちの仏教実践は活発化したのであり、1980年代にはこの僧侶を中心として仏教が復興した。しかし1990年代から、出家制限は撤廃されたものの、カリスマ的な僧侶が去ったことや都市化の影響などから、伝統的慣習としての一時出家はほとんど行われていない。かつて老年男性たちが一時出家によって寺院内で仏教的知識を身につけたのに対し、現在の若者たちはそうした知識を欠いている。老人に対して若者がしばしば口にする「チュオ・クラン・プレア(仏教を強く信じている)」という言葉は、老人が様々な儀礼で不可欠な存在となっていることを示すだけでなく、その仏教への傾倒ぶりを若者が嘲笑あるいは懐疑していることも表している。

調査地での以上のような老人と若者との知識の差あるいは認識のギャップが明瞭に現われるもののひとつに、「病者のための読経」という儀礼がある。この儀礼は重篤の病人を回復させることを目的としてなされ、かつては僧侶と俗人との協働によってなされていたが、1990年代半ば頃から、若い僧侶の知識不足により、老年男性を中心に俗人だけでおこなわれている。また、近代の医療観念の浸透により、若者たちは老人たちのおこなうこの儀礼に懐疑的でもある。近い将来、この儀礼自体が変容・消滅していくことが推測でき、ここに知識・実践の断絶が見られる。しかしながら、若者自らが病になる、あるいはその親が病になるという生活の危機の中で、仏教的知識が求められ、それを保持する身近な老人が必要とされる場合がある。ここから、寺院という学習の場ではなく俗人の生活の中で、仏教的知識が伝達されたり持続している可能性を指摘することができる。これらに加えて、寺院での学習を通じて獲得される知識と生活の中で伝達される知識がどのように異なるのかについても考察したい。

【カンボジア、上座仏教、老人と若者、知識】